

吟 題	作 者	教 本	ページ
【あ】			
嗚呼忠臣楠子の墓（嗚呼忠臣～）	生田鐵石	Ⅱ 卷	120
哀悼の詩（百歳の人生～）	本宮三香	慶弔	76
葵祭（地に落ちし～）	吉井 勇	和歌下巻	140
青の洞門（断崖絶壁～）	網谷一才	愛吟集	16
赤い椿（赤い椿～）	碧 梧桐	俳句・俳文他	12
あかつき方に出で立つ時に（をしからぬ～）	野村望東尼	和歌下巻	62
暁に順城門を出で何太虚を～（歩いて出ず～）	掲 傒斯	Ⅰ 卷	124
暁に発す（残月の滴露～）	月田蒙斎	Ⅲ 卷	22
赤馬が関を過ぐ（長風浪を破って～）	伊形靈雨	Ⅱ 卷	14
秋風の歌（しづかに～）	島崎藤村	朗詠集	118
秋風の歌（しづかに～）	島崎藤村	俳句・俳文他	104
秋の御歌に（真萩散る～）	永福門院	和歌下巻	8
朝顔に（朝顔に朝顔に釣瓶とられて貰ひ水～）	千代女	俳句・俳文他	32
翌もあり（翌もありあさてもありと～）	小林一茶	俳句・俳文他	89
安宅の関（暮鐘一点～）	角光嘯堂	愛吟集	39
「万葉集より」新しき（新しき年のはじめの～）	葛井諸会	慶弔	6
三年春正月一日に～（新しき年の初めの～）	大伴家持	和歌上巻	44
あつき日の（あつき日のあつき日の～）	木村岳風	俳句・俳文他	20
あはれ子の（あはれ子の夜寒の床の～）	中村汀女	俳句・俳文他	41
天草洋に泊す（雲か山か～）	頼 山陽	Ⅱ 卷	75
唐土にて月を見て詠みける（天の原～）	安部仲麻呂	朗詠集	22
唐土にて月を見て詠みける（天の原～）	阿部仲磨	和歌上巻	50
雨ニモマケズ（雨ニモマケズ～）	宮沢賢治	俳句・俳文他	118
荒海や	松尾芭蕉	朗詠集	101
嵐（しなのなる～）	賀茂真淵	和歌下巻	24
桜花三百首「あらたまの」（あらたまの～）	本居宣長	和歌下巻	28
ありし世に「新古今集より」（ありし世に～）	藤原兼房	慶弔	80
有間皇子、自ら傷みて～（家にあれば～）	有間皇子	和歌上巻	12
安政六年十月廿日書簡（親思ふ～）	吉田松陰	朗詠集	58
【い】			
家に花五十首歌よませ侍りける時（昔たれ～）	藤原良経	和歌上巻	150

垓下の歌（力山を抜き～）	項羽	I巻	162
凱旋（王師百万～）	乃木希典	III巻	36
海南行（人生五十～）	細川頼之	II巻	5
鏡に照らして白髪を見る（宿昔青雲の志～）	張九齡	III巻	144
柿くへば（柿くへば鐘が鳴るなり～）	正岡子規	俳句・俳文他	37
柿本朝臣人麻呂の～（天離る鄙の長道ゆ～）	柿本人麻呂	和歌上巻	16
柿本朝臣人麻呂の歌一首（近江の海夕波千鳥～）	柿本人麻呂	和歌上巻	20
「古今集より」限りなき（限りなき雲居の～）	読人知らず	慶弔	62
岳風先生を弔う（憶う君が意気～）	塩谷節山	慶弔	77
客舎の壁に題す（斯の志を成さんと欲して～）	雲井龍雄	II巻	41
客中（吟髪霜白～）	一休宗純	I巻	8
客中行（蘭陵の美酒～）	李白	II巻	140
家兄に寄せて志を言う（勤王の大義～）	広瀬武夫	III巻	33
花月吟（花屋琴を弾ず～）	藤野君山	愛吟集	27
嘉元百首歌に、山家を（庵近きつま木の道や～）	冷泉為相	和歌下巻	12
華甲を祝す（華甲躋り来って～）	松口月城	慶弔	34
夏日偶成（午倦書を抛って～）	三浦英蘭	I巻	36
夏初桜祠に遊ぶ（花開きて万人集い～）	広瀬旭荘	I巻	40
家書を得たり（未だ書中の語を読まずして～）	高啓	I巻	125
春日山懐古（春日山頭晚霞鎖～）	大槻磐溪	II巻	46
霞中春雨（隅田川蓑着て下す～）	橘千蔭	和歌下巻	32
花朝澱江を下る（桃花水暖かにして～）	藤井竹外	III巻	21
合戦川中島（千曲の川霧～）	角光嘯堂	愛吟集	31
鉦鳴らし（鉦鳴らし～）	久保田空穂	和歌下巻	90
鐘ひとつ（鐘ひとつ～）	其角	俳句・俳文他	4
峨眉山月の歌（峨眉山月～）	李白	I巻	96
画眉鳥（百轉千声～）	歐陽修	I巻	107
胄山の歌（胄山昨我を送り～）	頼山陽	II巻	77
鎌倉懐古（鎌倉の幕府は何所～）	窪田空穂	朗詠集	97
鎌倉懐古（鎌倉の幕府は何所～）	窪田空穂	和歌下巻	92
鴨社歌合とて人々よみ侍りけるに～（石川や～）	鴨長明	和歌上巻	152
軽皇子、安騎の野に～（東の野にかぎろいの～）	柿本人麻呂	和歌上巻	18
軽きに泣きて（たはむれに母を背負ひて～）	石川啄木	朗詠集	72
河内路上（南朝の古木～）	菊池溪琴	II巻	48
感有り（坐るに憶う天公の～）	山崎闇齋	II巻	9

銀河の序（越後の国出雲崎といふ～）	松尾芭蕉	俳句・俳文他	76
金婚を祝す（鴛鴦一たび～）	本宮三香	慶弔	33
銀婚式（二十五年清福多し～）	古川松梁	慶弔	32
金州城下の作（山川草木～）	乃木希典	I 卷	32
吟友の死を悼む（惓惓友に接して～）	佐佐木岳甫	慶弔	79
金陵の鳳凰台に登る（鳳凰台上～）	李 白	III 卷	154
金縷の衣（君に勧む惜しむ莫れ～）	杜 秋娘	III 卷	132
【く】			
偶感（孤峰～）	勝 海舟	I 卷	43
偶感（幾度か辛酸を歴て～）	西郷南洲	II 卷	44
偶作（塵殺す江南～）	武田信玄	II 卷	6
偶成（一穂の寒燈～）	木戸孝允	I 卷	76
偶成（才子才を恃み～）	木戸孝允	II 卷	45
偶成（少年老い易く～）	朱 熹	II 卷	150
偶成（三十年來～）	武林唯七	III 卷	7
偶成（富貴功名～）	瀬川雅亮	III 卷	38
偶成（天地生を育むに～）	勝 海舟	III 卷	89
偶然の作（百金駿馬を買い～）	屈 復	II 卷	163
九月十三夜（霜は軍營に満ちて～）	上杉謙信	I 卷	9
九月尽（九月尽遙かに能登の岬かな～）	加藤暁台	俳句・俳文他	34
九月十日（去年の今夜～）	菅原道眞	I 卷	7
虞姫（大王真に英雄～）	呉 永和	I 卷	127
草枕（夕波くらく啼く千鳥～）	島崎藤村	俳句・俳文他	100
九段の桜（靖国の宮に御霊は鎮まるも～）	本宮三香	愛吟集	10
虞美人草（鴻門の玉斗紛として雪の如し～）	曾 鞏	III 卷	182
「新古今集より」曇りなく（曇りなく千歳に～）	紫 式部	慶弔	28
暮山雪（渡りかね雲も夕をなほたどる～）	正 徹	和歌下巻	14
暮坂峠（乾きたる落葉のなかに栗の實を～）	若山牧水	俳句・俳文他	114
くれないの（くれないの二尺のびたる薔薇の～）	正岡子規	和歌下巻	74
晩の鐘（いつよりか入相のかねはなりつらむ～）	大隈言道	和歌下巻	60
軍城早秋（昨夜秋風～）	嚴 武	I 卷	99
【け】			
京師にて家書を得たり（江水三千里～）	袁 凱	I 卷	126

江雪（千山鳥飛び絶え万径～）	柳 宗元	Ⅲ巻	146
江村晚眺（江頭の落日平沙を照らす～）	戴 復古	Ⅰ巻	112
弘道館にて梅花を賞す（弘道館中千樹の梅～）	徳川齊昭	Ⅱ巻	34
江都客裡雑詩（八百八街宵月明らかなり～）	頼 杏坪	Ⅱ巻	24
江南故人に寄す（曾て銭塘に向いて住す～）	家 鉉翁	Ⅰ巻	123
江南の春（千里鶯啼いて緑紅に映ず～）	杜 牧	Ⅱ巻	145
高郵雨泊（寒雨の秦郵に夜船を泊す～）	王 士禛	Ⅰ巻	115
紅葉館にて饗飲席上率に賦す（七十の青涯～）	國分青厓	Ⅰ巻	35
江楼にて感を書す（独り江楼に上りて～）	趙 嘏	Ⅱ巻	147
江楼にて感を書す（独り江楼に上りて～）	趙 嘏	慶弔	69
香炉峰下新に山居を～（日高く睡り足りて～）	白 居易	Ⅰ巻	140
胡笳の歌（君聞かずや胡笳の声～）	岑 參	Ⅱ巻	192
古希を寿ぐ	松口月城	慶弔	35
国体篇（邈たり二千六百秋～）	岩崎行親	愛吟集	53
獄中感有り（朝に恩遇を蒙りて～）	西郷南洲	Ⅱ巻	81
獄中作（君見ずや死して忠鬼と為る～）	高杉晋作	Ⅱ巻	100
獄中作（雲を排し手ずから～）	頼 三樹三郎	Ⅲ巻	51
獄中作（行くに輿無く～）	秋月胤永	愛吟集	50
九日後朝同に愁思を～（丞相年を渡りて～）	菅原道眞	Ⅰ巻	46
心かはり侍りける女に～（契りきな～）	清原元輔	和歌上巻	82
志を言う（俯しては郷国を思い～）	藤田東湖	Ⅰ巻	21
「三夕の歌」こころなき（心なき身にもあは～）	西行法師	和歌上巻	126
「三夕の歌」こころなき（心なき身にもあは～）	西行法師	朗詠集	36
心に太陽を持って（心に太陽を持って～）	山本有三	俳句・俳文他	123
心の鐘（今日もまた心の鐘を～）	若山牧水	朗詠集	82
心の鉦（今日もまた心の鉦を～）	若山牧水	和歌下巻	124
古詩（明月皎として～）	（作者不詳）	Ⅰ巻	169
児島高德桜樹に～（踏破る千山～）	斎藤監物	Ⅱ巻	71
五十首歌奉りし時（村雨の霧もまだ干ぬ～）	寂蓮法師	和歌上巻	140
五十首歌奉りし時、月の前に～（大江山～）	慈 円	和歌上巻	156
五節の舞姫を見て詠める（天つ風～）	良岑宗貞	和歌上巻	64
姑蘇台（姑蘇台上～）	絶海中津	Ⅰ巻	48
こだま（ふるさとの谷のこだまに～）	石川啄木	朗詠集	76
こだま（ふるさとの谷のこだまに～）	石川啄木	和歌下巻	132

	製		
左遷せられて藍関に至り～（一封朝に奏す～）	韓 愈	I 卷	138
左大臣家「十楽の心」（むらさきの雲ぢに～）	寂蓮法師	和歌上卷	142
「陸游作」雑興（草鋤けど春は萌え萌ゆ～）	佐藤春夫訳	朗詠集	138
雑詩（防秋復た返らず～）	皆川淇園	I 卷	56
雑詩（人生根帯無く～）	陶 潜	III 卷	186
茶道吟（花をのみ待つらむ人に山里の～）	藤原家隆・外	愛吟集	90
「三夕の歌」さびしきは（寂しさはその色としも～）	寂蓮法師	和歌上卷	138
「三夕の歌」さびしきは（寂しさはその色としも～）	寂蓮法師	朗詠集	40
さみだれや（さみだれや大河を前に～）	与謝蕪村	俳句・俳文他	18
山園小梅（衆芳揺落して独り暄妍～）	林 逋	III 卷	164
山家（山里は松の声のみ～）	太田垣蓮月尼	和歌下卷	64
三月三日重ねて虎邱に遊ぶ（細雨霏霏として～）	郭 麟孫	I 卷	146
山間の秋夜（夜色秋光～）	眞 山民	III 卷	141
山居（青山高く聳ゆ白雲の辺～）	藤原惺窩	I 卷	10
山行（遠く寒山に上れば石径斜なり～）	杜 牧	I 卷	105
山行同志に示す（路は羊腸に入って～）	草場佩川	II 卷	39
「三夕の歌」こころなき（心なき身にもあは～）	西行法師	和歌上卷	126
「三夕の歌」こころなき（心なき身にもあは～）	西行法師	朗詠集	36
「三夕の歌」さびしきは（寂しさはその色としも～）	寂蓮法師	和歌上卷	138
「三夕の歌」さびしきは（寂しさはその色としも～）	寂蓮法師	朗詠集	40
「三夕の歌」見わたせば（見わたせば花も紅葉も～）	藤原定家	朗詠集	46
「三夕の歌」見わたせば（見わたせば花も紅葉も～）	藤原定家	和歌上卷	166
山中諸生に示す（溪辺流水に坐す～）	王 陽明	II 卷	162
山中即事（雲来たって千嶂合し～）	市村器堂	III 卷	48
山中にて幽人と対酌す（兩人対酌して山花く～）	李 白	III 卷	123
山中の歌（余に問う山中に棲むこと幾年ぞと～）	国分青厓	III 卷	37
山中の雲（我は愛す山中の雲～）	眞 山民	II 卷	180
山中の月（我は愛す山中の月～）	眞 山民	I 卷	158
山中の月（驚き見る東山～）	藪 孤山	III 卷	10
山中間答（余に問う何の意あって～）	李 白	II 卷	141
山亭の夏日（緑樹陰濃やかにして～）	高 駢	III 卷	135
三年春正月一日に～（新しき年の初めの～）	大伴家持	和歌上卷	44
散歩（散歩流水に沿う～）	梁川紅蘭	I 卷	62

【し】			
四時（春水四沢に満ち～）	陶 潜	Ⅱ巻	155
慈烏夜啼く（慈烏其の母を失い～）	白 居易	Ⅱ巻	195
自詠（家を離れて三四月～）	菅原道眞	Ⅱ巻	61
自詠（独り高楼に上って～）	呂 洞賓	愛吟集	107
四海波（四海波恬かにして～）	本宮三香	慶弔	21
四十七士（臥薪嘗胆幾辛酸～）	大塩平八郎	Ⅱ巻	26
自訟（岳に登りて天下を小とし～）	杉浦重剛	Ⅰ巻	44
静 若宮八幡へ参詣の事	静御前	和歌上巻	132
静御前（工藤の銅拍秩父の鼓～）	頼 山陽	Ⅱ巻	98
静御前（よしのやま みねのしらゆき ふみわけて～）	松口月城	愛吟集	19
閑かさや（閑かさや閑かさや岩にしみ入る～）	松尾芭蕉	俳句・俳文他	16
閑かさや（閑かさや閑かさや岩にしみ入る～）	松尾芭蕉	朗詠集	102
しづのをだまき（しづやしづしづのをだまき～）	静御前	朗詠集	34
辞世（吾今国の為に死す～）	吉田松陰	Ⅱ巻	62
七歩の詩（豆を煮るに豆萁を燃く～）	曹 植	Ⅰ巻	164
失題（一貫唯唯として諾す～）	西郷南洲	Ⅰ巻	60
失題（神知靈覺湧いて泉の如し～）	横井小楠	Ⅱ巻	40
失題（才子元来多く事を過る～）	古荘嘉門	Ⅱ巻	56
失題（去歳千軍我が疆に逼る～）	木戸孝充	Ⅲ巻	26
児に示す（死し去れば本知る万事空しきを～）	陸 游	Ⅰ巻	111
死にたまふ母「のど赤き」（のど赤き）	斎藤茂吉	和歌下巻	106
死にたまふ母「みちのくの～」	斎藤茂吉	和歌下巻	104
娑婆歌（縦い鉄鑊の湯を呑むとも～）	日柳燕石	愛吟集	47
従軍行（秦時の明月漢時の関～）	王 昌齡	Ⅱ巻	135
十五夜月を望む（中庭地白くして樹鴉を～）	王 建	Ⅱ巻	144
秋思（洛陽城裏秋風を見る～）	張 籍	Ⅲ巻	128
秋日（返照閨巷に入る～）	耿 漳	Ⅰ巻	120
秋日弟を懐う（生涯汝の自ら樵蘇するを～）	謝 榛	Ⅰ巻	148
秋日偶成（閑来事として従容たらざるは～）	程 明道	Ⅱ巻	172
秋日友人に別る（林葉翩翩秋日曛れ～）	巨勢識人	Ⅰ巻	6
啾啾吟（知者は惑わず仁者は憂えず～）	王 陽明	Ⅱ巻	199
秋色信濃路（秋色一点信濃の天～）	角光嘯堂	愛吟集	72
秋夕琵琶湖に泛ぶ（湖北湖南暮色濃やかなり～）	梁田蛻巖	Ⅲ巻	9
舟艇守の尺八（炎熱の夏は去りて秋風来たる～）	大野弧山	愛吟集	65

秋風の辞（秋風起こって白雲飛び～）	漢の武帝	I 卷	172
秋浦の歌（白髪三千丈～）	李 白	III 卷	145
秋夜（黄萎の顔色白霜の頭～）	菅原道眞	II 卷	63
秋夜丘二十二員外に寄す（君を懐うて秋夜に～）	韋 應物	I 卷	121
左大臣家「十楽の心」（むらさきの雲ちに～）	寂蓮法師	和歌上卷	142
守覚法親王家に～（たちかえり又もきて見ん～）	藤原俊成	和歌上卷	136
守覚法親王の五十首歌に（しもまよふ～）	藤原定家	和歌上卷	168
祝賀の詞（四海波平かにして～）	河野天籟	慶弔	8
祝事（今日紅を繞らして～）	佐佐木岳甫	慶弔	7
塾生に示す（君が曹士為らんと欲せば～）	尾藤二洲	I 卷	70
述懐（慷慨山の如く～）	雲井龍雄	II 卷	42
述懐（十有三春秋～）	頼 山陽	II 卷	73
述懐（三たび死を決して～）	藤田東湖	III 卷	74
出郷の作（決然国を去って～）	佐野竹之助	II 卷	35
出塞行（白草原頭京師を望めば～）	王 昌齡	I 卷	93
春雨（春陰雨を成し易く～）	陸 游	III 卷	151
春暁（春眠暁を覚えず～）	猛 浩然	I 卷	117
春景（菜の花や月は東に日は西に～）	與謝蕪村	朗詠集	105
春江花月の夜（春江の潮水海に連なって～）	張 若虞	III 卷	173
春行興を寄す（宜陽城下草萋萋～）	李 華	I 卷	101
春日村行（郊外筈を牽けば一路通ず～）	木村岳風	III 卷	39
春日偶成（道う莫かれ風塵に老ゆと～）	夏目漱石	III 卷	46
春日雑詩（千枝の紅雨万重の～）	袁 枚	III 卷	143
春日の作（楊柳花飛んで～）	新井白石	I 卷	13
春夕（月は訪れて梅花好主と為り～）	佐藤一斎	III 卷	16
春望（国破れて山河在り～）	杜 甫	I 卷	154
春夜（春宵一刻値千金～）	蘇 軾	II 卷	148
春夜洛城に笛を聞く（誰が家の玉笛か暗に～）	李 白	II 卷	138
巡礼お鶴（杖を力にとぼとぼと～）	網谷一才	愛吟集	14
性空上人のもとに詠みて～（暗きより暗き～）	和泉式部	和歌上卷	102
湘江を渡る（遅日園林昔遊を悲しむ～）	杜 審言	I 卷	90
湘江を渡る（遅日園林昔遊を悲しむ～）	杜 審言	慶弔	39
鍾山即事（澗水声無く竹を繞りて流る～）	王 安石	III 卷	138
障子の絵に～（ふるさとはちるもみぢばに～）	源 俊頼	和歌上卷	118
焦心録後に題す（内憂外患吾が州に迫る～）	高杉晋作	III 卷	23

松竹梅（寿福愈開く松竹梅～）	松口月城	愛吟集	9
城東の荘に宴す（一年初めて一年の春有り～）	崔 敏童	Ⅱ巻	133
聖徳太子～（級照るや片岡山に飯に飢ゑて～）	聖徳太子	和歌上巻	8
小楠公（乃父の訓は骨に銘じ～）	元田東野	Ⅱ巻	105
小楠公の母（南朝の烈婦姓は楠木～）	本宮三香	愛吟集	33
湘夫人の詠（木蘭芙蓉芳州に満つ～）	元 好問	Ⅰ巻	187
初夏（四月清和雨乍ち晴れ～）	司馬 光	Ⅰ巻	108
書懷（一葦纔に西すれば～）	（作者不詳）	Ⅱ巻	83
書懷（人生元長からず～）	（作者不詳）	Ⅲ巻	87
滁州の西澗（独り憐れむ幽草の澗辺に～）	韋 應物	Ⅲ巻	126
初冬の作（荷は尽きて已に雨を撃ぐるの～）	蘇 軾	Ⅰ巻	110
侍輿の歌（余芸に到りて留まること～）	頼 山陽	Ⅱ巻	92
除夜の作（旅館の寒灯独り眠らず～）	高 適	Ⅲ巻	124
白菊の花をよめる（心あてに折らばや折らむ～）	凡河内躬恒	和歌上巻	74
白鳥は（白鳥はかなしからずや空の青～）	若山牧水	朗詠集	84
白鳥は（白鳥はかなしからずや空の青～）	若山牧水	和歌下巻	118
白埴の（白埴の瓶こそよけれ～）	長塚 節	和歌下巻	102
城山（孤軍奮闘囲みを破って還る～）	西 道仙	Ⅱ巻	55
子和の参州に～（唱うるを休めよ陽関～）	山縣周南	Ⅱ巻	12
子和の参州に～（唱うるを休めよ陽関～）	山県周南	慶弔	56
児を弔う（夙に阿兄に学んで好んで篇を手にする～）	町田鳳陽	慶弔	72
新天草洋（雲か山か呉か越か～）	藤野君山	愛吟集	21
新近江八景（瀬田の唐橋石山寺～）	木村岳風	Ⅲ巻	95
新嫁の娘（三日の廚下に入り～）	王 建	愛吟集	105
神亀元年～（若の浦に潮満ち来れば潟をなみ～）	山部赤人	和歌上巻	38
神州（峻嶒たる富岳千秋に聳ゆ～）	乃木希典	Ⅱ巻	54
新正口号（淑気未だ融らず春尚遅し～）	武田信玄	Ⅲ巻	5
新築を賀す（建築功成りて新屋香ばし～）	松口月城	慶弔	27
陣中の作（稀に柳楊有るも竹梅無し～）	乃木希典	Ⅲ巻	35
新年（客来って笑う野人の家に似たりと～）	藤井竹外	慶弔	4
新年祝いの詩（淑気乾坤万物新なり～）	木村岳風	慶弔	1
新年雪裏の梅花～（春光初めて動けども寒～）	有智子内親王	Ⅰ巻	5
新涼書を読む（秋は動く梧桐葉落つるの初～）	菊池三溪	Ⅱ巻	50

秦淮に泊す（煙は寒水を籠め月は沙を籠む〜）	杜 牧	Ⅲ巻	133
【す】			
炊煙起る（煙未だ浮かばず天皇愁いたもう〜）	頼 山陽	Ⅲ巻	72
睡起偶成（四十余年睡夢の中〜）	王 陽明	Ⅱ巻	152
直なるも（直なるも曲がるも同じ世の中ぞ〜）	小林一茶	俳句・俳文他	91
薄随風（ひとかたに靡きそろひて花すすき〜）	香川景樹	和歌下巻	36
駿河国うつ〜（するがなるうつのやまべの〜）	在原業平	和歌上巻	60
諏訪湖畔（みづうみの氷は解けてなほ寒し〜）	島木赤彦	朗詠集	78
諏訪湖畔（みづうみの氷は解けてなほ寒し〜）	島木赤彦	和歌下巻	88
【せ】			
正気之歌（死生命有り論ずるに足らず〜）	広瀬武夫	Ⅱ巻	109
青春（青春とは人生の或る期間を〜）	サエリルマン	俳句・俳文他	127
成人式（心身を鍛錬して志始めて堅し〜）	落合東郭	慶弔	16
清明（清明の時節雨紛紛〜）	杜 牧	Ⅲ巻	134
静夜思（牀前月光を看る〜）	李 白	Ⅰ巻	119
清夜の吟（月天心に到るの処〜）	邵 雍	Ⅲ巻	150
磧中の作（馬を走らせて西来天に到らんと〜）	岑 参	Ⅲ巻	125
赤壁（一面の東風百万の軍〜）	袁 枚	Ⅰ巻	150
赤心報国（国を思ひ寝られざる夜の霜の色〜）	橘 曙覧	和歌下巻	58
絶句（江碧にして鳥逾白く〜）	杜 甫	Ⅱ巻	159
攝州路上（酒家の紛壁晴波に映ず〜）	頼 山陽	Ⅲ巻	13
雪中梅を見る（寒蓑立ち尽くす水の涯〜）	寺門静軒	Ⅲ巻	24
雪梅（梅有りて雪無ければ精神ならず〜）	方 岳	Ⅱ巻	151
折楊柳（水辺の楊柳麴塵の糸〜）	楊 巨源	Ⅲ巻	127
折楊柳（水辺の楊柳麴塵の糸〜）	楊 巨源	慶弔	48
泉岳寺の作（山岳崩すべし海翻すべし〜）	坂井虎山	Ⅲ巻	14
先妣の十七回忌〜（旧夢茫茫たり十七春〜）	菅 茶山	Ⅰ巻	19
前兵児の謡（衣は肝に至り袖腕に至る〜）	頼 山陽	Ⅱ巻	79
【そ】			
桑乾を度る（客舎へい州已に十霜〜）	賈 島	慶弔	49
双殉行（戦雲城を圧して城壊れんと欲す〜）	竹添井井	Ⅱ巻	116
蜀相（丞相の祠堂何れの処にか尋ねん〜）	杜 甫	Ⅲ巻	158
草堂に別る（三間の茅舎山に向って開き〜）	白 居易	慶弔	50

【つ】			
追悼の詩（人生は夢の如く亦烟の若し～）	安達漢城	慶弔	73
塚も動け（塚も動け我泣く声は秋の風～）	松尾芭蕉	朗詠集	104
塚も動け（塚も動け我泣く声は秋の風～）	松尾芭蕉	俳句・俳文他	24
月やあらぬ（月やあらぬ春や昔の春ならぬ～）	在原業平	和歌上巻	62
露の世は	良 寛	和歌下巻	38
つけ捨てし（つけ捨てし野火の烟のあか～）	尾上柴舟	和歌下巻	86
続け湯川博士に（少年老い易く学成り難し～）	木村岳風	愛吟集	58
謹みて蕪詩一篇を霊前に供す（共に吟道を～）	木村岳風	慶弔	74
早に白帝城を発す（朝に辞す白帝彩雲の間～）	李 白	Ⅱ巻	136
早に深川を発す（月落ちて人煙曙色分かる～）	平野金華	Ⅱ巻	10
露と落ち（露と落ち露と消えにしわが身かな～）	豊臣秀吉	和歌下巻	16
露の世は（露の世は露の世ながら～）	小林一茶	俳句・俳文他	35
【て】			
天（あさみどり澄み渡りたる大空の～）	明治天皇御製	朗詠集	66
田園雑興（矮籬風圧して牽牛掛かり～）	伊藤東涯	Ⅰ巻	15
天姥山（天姥山頭秋月明らかに～）	佐久間象山	Ⅲ巻	19
天門山を望む（天門中断して楚江開く～）	李 白	Ⅱ巻	142
天曆の御時の歌合（忍ぶれど色に出でにけり～）	平 兼盛	和歌上巻	84
【と】			
滕王閣（滕王の高閣江渚にのぞむ～）	王 勃	Ⅱ巻	164
道灌蓑を借るの図に題す（孤鞍雨を衝いて～）	（作者不詳）	Ⅱ巻	47
登高（風急に天高くして猿嘯哀し～）	杜 甫	Ⅲ巻	160
東城（野店の桃花紅粉の姿～）	趙 孟頫	Ⅰ巻	113
同窓会の歌（満筵の佳客是れ同覺～）	谷口雲泉	慶弔	15
董大に別る（十里の黄雲白日曛れ～）	高 適	慶弔	44
洞庭に遊ぶ（洞庭西に望めば楚江分かる～）	李 白	Ⅱ巻	139
悼亡（葉爐経巻生涯を送る～）	王 士禛	慶弔	71
冬夜読書（雪は山堂を擁して樹影深し～）	菅 茶山	Ⅱ巻	16
登楼（花は高楼に近うして客心を傷ましむ～）	杜 甫	Ⅰ巻	132
十団子も（十団子も小粒になりぬ秋の風～）	森川許六	俳句・俳文他	28

西紅海舟中の作（煙は鎖す～）	中井櫻洲	Ⅲ巻	32
二十三日に興に依りて作る歌（春の野に～）	大伴家持	和歌上巻	42
入学を祝す（玉若し磨かざれば～）	木村岳風	慶弔	13
入道撰政まかりたりけるに～（嘆きつつ～）	右大将道綱母	和歌上巻	88
爾靈山（爾靈山は険なれども～）	乃木希典	Ⅱ巻	53
忍字に題す（一たび忍べば七情～）	中江藤樹	Ⅱ巻	7
【ね】			
念仏坊（追風や～）	小林一茶	俳句・俳文他	95
【の】			
農を憫む（禾を鋤きて～）	李 紳	Ⅱ巻	160
死にたまふ母「のど赤き」（のど赤き）	斎藤茂吉	和歌下巻	106
【は】			
梅花（瓊姿只合に～）	高 啓	Ⅱ巻	178
梅花の詩（五弁花開いて～）	本宮三香	愛吟集	29
梅溪の春暁（千巖～）	上 夢行	Ⅰ巻	85
菽寺にてよめる歌～（菽寺の菽おもしろし～）	落合直文	和歌下巻	70
白雲山に登る（白雲山上～）	太宰春臺	Ⅱ巻	11
白頭吟（皚たること～）	卓 文君	Ⅰ巻	166
白頭を悲しむ翁に代る（洛陽城東～）	劉 廷芝	Ⅲ巻	168
伊豆の海（箱根路を～）	源 實朝	朗詠集	44
はこねにまうづとて（箱根路を～）	源 実朝	和歌上巻	154
はこねにまうづとて（箱根路を～）	源 実朝	和歌上巻	154
八月十五夜～（銀台金闕～）	白 居易	Ⅰ巻	142
八月十五夜月前に旧を語る（秋月は知らず～）	菅原道眞	Ⅱ巻	4
鉢の木（駒とめて～）	松口月城	愛吟集	83
八幡公（結髪軍に従って～）	頼 山陽	Ⅱ巻	19
初夢（波静かに亀遊ぶ～）	本宮三香	慶弔	3
花すすき（ひとかたに～）	香川景樹	朗詠集	56
花の雲（花の雲～）	松尾芭蕉	俳句・俳文他	3
母の心（溽暑湘南～）	大野孤山	Ⅱ巻	128
母を送る路上の短歌（東風に～）	頼 山陽	Ⅱ巻	89
母を憶う（秋風～）	頼 山陽	Ⅰ巻	39

舊年に春たちける日よめる（年のうちに～）	在原元方	和歌上巻	70
降る雪や（降る雪や～）	中村草田男	俳句・俳文他	50
文天祥の正気の歌に和す（天地正大の気～）	藤田東湖	Ⅲ巻	101
【へ】			
米寿を賀す（延齢～）	松口月城	慶弔	37
壁に題す（男児志を立てて郷関を出ず～）	釋 月性	Ⅱ巻	31
兵児謡（負くれば是れ賊～）	末松謙澄	Ⅲ巻	93
別詩（洛陽城の～）	范 雲	Ⅱ巻	156
別府（楼上～）	広瀬淡窓	慶弔	57
辺詩（五原の春色～）	張 敬忠	Ⅲ巻	119
【ほ】			
某楼に飲す（豪気堂堂～）	伊藤博文	Ⅱ巻	52
鳳闕を拝す（山河襟帯～）	吉田松陰	Ⅲ巻	82
望湖楼の酔書（黒雲墨を翻して～）	蘇 軾	Ⅲ巻	139
豊楽亭に春を遊ぶ（紅樹青山～）	歐陽 脩	Ⅲ巻	137
星落秋風五丈原（○山悲秋の風更けて～）	土井晚翠	朗詠集	124
戊子の夏諸生と月を～（清風座に満ち～）	中江藤樹	Ⅱ巻	8
細川玉子（群雄覇を争いし～）	木村岳風	Ⅲ巻	97
蛩を観る（柳外の流光～）	大槻磐溪	Ⅰ巻	28
牡丹花は（牡丹花は～）	木下利玄	和歌下巻	128
北海道巡遊中作（蹇蹇匪躬～）	伊藤博文	Ⅰ巻	31
堀河院の御時～（照射する～）	大江匡房	和歌上巻	116
暮立	白 居易	Ⅲ巻	131
本朝文粹より	大江朝綱	慶弔	86
本能寺（本能寺～）	頼 山陽	Ⅰ巻	68
【ま】			
将に小梅村の～（青年此の地～）	藤田東湖	Ⅲ巻	15
将に東遊せんとして壁に～（男児志を立てて～）	釋 月性	Ⅱ巻	31
松島や（松島や松島や～）	河合曾良	俳句・俳文他	15
松の葉の（松の葉の二葉一葉に色かえず～）	相馬御風	慶弔	20
松前城下の作（海城の寒柝～）	長尾秋水	Ⅰ巻	24
人あまたありて～（赤裸の～）	橘 曙覧	和歌下巻	54

漫述(誇る者は汝の～)	佐久間象山	I 卷	41
漫成(丈夫生れて～)	蒲生君平	III 卷	49
【み】			
自ら肖像に題す(蒼顔鉄の如く～)	新井白石	III 卷	8
みちのくに～(都をば～)	能因法師	和歌上卷	112
陸奥の国に平泉に～(ききもせず～)	西行法師	和歌上卷	122
死にたまふ母「みちのくの～」	斎藤茂吉	和歌下卷	104
貢物許されて国富めるを～(たかき屋に～)	仁徳天皇	和歌上卷	6
水戸八景(雪時嘗て賞す～)	徳川齊昭	II 卷	69
源義経(昔なつかし束稲の～)	網谷一才	愛吟集	12
身はたとひ(身はたとひ～)	吉田松陰	和歌下卷	48
「三夕の歌」見わたせば(見わたせば花も紅葉も～)	藤原定家	朗詠集	46
「三夕の歌」見わたせば(見わたせば花も紅葉も～)	藤原定家	和歌上卷	166
【む】			
武蔵の国の歌(多摩川に～)	作者不詳	和歌上卷	48
武蔵の野邊(身はたとひ～)	吉田松陰	朗詠集	60
無心(花は無心にして～)	良 寛	III 卷	99
無題(落花粉粉～)	村上佛山	III 卷	85
無欲(欲無ければ～)	良 寛	I 卷	66
【め】			
名鎗日本号(美酒元来吾が好む所～)	松口月城	愛吟集	18
目出度さも(目出度さも～)	小林一茶	俳句・俳文他	11
目には青葉(目には青葉～)	山口素堂	俳句・俳文他	14
【も】			
蒙古来(筑海の颯気～)	頼 山陽	II 卷	95
孟寂を哭す(曲江院裏～)	張 籍	慶弔	70
毛越寺懐古(大門の～)	佐佐木信綱	和歌下卷	78
「おくのほそ道より」最上川(最上川は～)	松尾芭蕉	俳句・俳文他	72
物いへば(物いへば～)	松尾芭蕉	俳句・俳文他	27
師賢朝臣の梅津の山里に～(夕されば～)	源 経信	和歌上卷	114
唐土にて月を見て詠みける(天の原～)	安部仲麻呂	朗詠集	22

唐土にて月を見て詠みける（天の原～）	阿部仲麿	和歌上巻	50
門を出でず（一たび謫落して～）	菅原道眞	Ⅱ巻	65
【や】			
夜雨北に寄す（君帰期を問えども～）	李 商隠	Ⅰ巻	106
「古事記より」八雲立つ（八雲立つ～）	須佐之男命	和歌上巻	2
夜坐（金風颯颯群陰を醸す～）	藤田東湖	Ⅱ巻	27
夜坐（独り秋庭に坐すれば～）	王 陽明	Ⅲ巻	166
瘦蛙（瘦蛙～）	小林一茶	朗詠集	108
瘦蛙（瘦蛙～）	小林一茶	俳句・俳文他	9
夜雪（已訝る～）	白 居易	Ⅲ巻	147
夜直（金炉香尽きて～）	王 安石	Ⅰ巻	109
柳あをめる（やはらかに～）	石川啄木	朗詠集	74
やは肌の（やは肌の～）	与謝野晶子	和歌下巻	100
やはらかに（やはらかに～）	石川啄木	和歌下巻	134
病に沈みし時の歌（士やも～）	山上憶良	朗詠集	14
「古今集より」山風に（山風に～）	僧正遍昭	慶弔	61
山ざくら（敷島の～）	本居宣長	朗詠集	50
山ざくら（敷島の～）	本居宣長	和歌下巻	26
山路（月よみの～）	良 寛	朗詠集	52
大和ぶり（ゆく秋の～）	佐佐木信綱	和歌下巻	80
山吹（七重八重～）	兼明親王	朗詠集	30
山部宿禰～（天地の～）	山部赤人	和歌上巻	34
山水（眞木ふかき～）	今井邦子	朗詠集	88
山水（眞木ふかき～）	今井邦子	和歌下巻	144
山を看る（山を看れば～）	新島 襄	Ⅲ巻	45
【ゆ】			
夕顔の（夕顔の～）	正岡子規	和歌下巻	76
友人を送る（青山～）	李 白	Ⅰ巻	152
夕の花を（花の上に～）	永福門院	和歌下巻	6
雪五尺（これがまあ～）	小林一茶	朗詠集	109
行く我に（行く我に～）	正岡子規	俳句・俳文他	36
指をもて（指をもて～）	土岐善麿	和歌下巻	112
夢（夢ならで～）	若山牧水	和歌下巻	126
【よ】			

酔うて祝融峰を下る（我来たつて万里～）	朱 熹	Ⅱ卷	149
楊柳枝詞（煬帝の行宮～）	劉 禹錫	Ⅰ卷	104
吉田義卿を送る（之の子靈骨有り～）	佐久間象山	Ⅲ卷	114
芳野（古陵の松柏～）	藤井竹外	Ⅰ卷	26
芳野（今来古往～）	梁川星巖	Ⅱ卷	30
芳野（山禽叫び断えて～）	河野鐵兜	Ⅱ卷	37
芳野懷古（暁ならんと欲するの溪山～）	正墻適處	Ⅰ卷	27
吉野上市（ふるさとに～）	土屋文明	和歌下卷	142
芳野に遊ぶ（万人酔を買って～）	頼 杏坪	Ⅱ卷	25
世の中は（世の中は～）	大島蓼太	俳句・俳文他	6
「新古今集より」夜もすがら（夜もすがら～）	大江匡衡	慶弔	82
よもすがら（よもすがら秋風聞くや～）	河合曾良	俳句・俳文 他	25
夜天池に宿し～（昨夜月明～）	王 陽明	Ⅰ卷	114
夜墨水を下る（金竜山畔～）	服部南郭	Ⅰ卷	17
【ら】			
乱を避け～（江湖に落魄して～）	足利義昭	Ⅲ卷	6
【り】			
立春の心を詠み侍りける（み吉野は～）	藤原良経	和歌上卷	148
柳州の城楼に～（城上の高楼～）	柳 宗元	Ⅰ卷	136
靈山（三十六峰～）	徳富蘇峰	Ⅲ卷	41
涼州詞（黄河遠く上る～）	王 之涣	Ⅰ卷	91
涼州詞（葡萄の美酒～）	王 翰	Ⅰ卷	92
竜池篇（竜池竜躍って～）	沈 佺期	Ⅲ卷	152
りんてん機（りんてん機～）	土岐善磨	和歌下卷	114
【れ】			
零丁洋を過ぐ（辛苦漕逢～）	文 天祥	Ⅱ卷	176
【ろ】			
朗詠（声気堂堂～）	新田 興	Ⅰ卷	4
老泣（老泣声無く～）	梁川星巖	Ⅰ卷	23

鹿柴（空山～）	王 維	Ⅱ 卷	158
廬山の瀑布を望む（日は香炉を照らして～）	李 白	Ⅱ 卷	137
【わ】			
「新古今集より」わが君は（わが君は～）	読人知らず	慶弔	29
和歌の題を～（昨夜～）	山縣周南	Ⅰ 卷	38
わが身ありとは（君が世を～）	梅田雲濱	朗詠集	62
わが身ありとは（君が世を～）	梅田雲濱	和歌下巻	50
分け入っても（分け入っても～）	種田山頭火	俳句・俳文他	53
「新古今集より」別れての（別れての～）	大江千里	慶弔	64
別れても（別れても～）	平野国臣	慶弔	67
われ男の子（われ男の子～）	与謝野鉄幹	和歌下巻	84
我と来て（我と来て～）	小林一茶	朗詠集	107
我と来て（我と来て～）	小林一茶	俳句・俳文他	10
【を】			
をのこども詩を作りて～（見わたせば～）	後鳥羽院	和歌上巻	164
をととひの（をととひの～）	正岡子規	俳句・俳文他	39